

自分を信じて



大野益弘

[監修]

輝くアスリートの
感動物語
東京オリンピック・
パラリンピック2020

あかね書房

歴史の扉を
全開にした、
左ジャブ！

入江聖奈



入江聖奈

二十歳の新星が、日本ボクシング界にあらわれた。東京大会で、ボクシング日本女子初の金メダルを獲得した、フェザー級の入江聖奈だ。

オリンピックの歴史の扉を開く快拳をなしとげた、すごい選手。

その一方で「わたしは本当に運動オンチで、さかあがりもできないくらい」と笑う。「努力をあきらめなかったら何かつかむことができるんだと、(運動が苦手な子にも)教えてあげられたのかな」

金メダリストとしてテレビ出演が続いた入江は、陽気なコメントで皆を笑わせる「カエル好きの天然キャラ」として、たちまち人気者となった。

日本のボクシング女子選手に立ちはだから扉

ボクシングは、グローブをはめたこぶしで、お互いの上半身を打ちあう競技だ。

2012年ロンドン大会からは、ボクシング女子も正式に採用された。

オリンピックでは男女ともに、1分間のインターバル(休憩)をはさんで、3分間のラウンドを3回おこなう。

強烈なパンチで相手をノックアウト(KO)するか、ジャッジの判定で、勝敗が決まる。

体重別に細かく階級が分けられていて、女子は軽い順に「フライ級、フェザー級、ライト級、ウェルター級、ミドル級」となっている。

日本のボクシング女子選手は、メダル獲得どころか、これまでのオリンピックに出場したことがなかった。それほどまでに強固な扉が、入江をはじめ女子選手の前に大きく立ちはだかっていたのだ。

左ジャブが、攻撃と防御の軸

入江が得意としているパンチは、左ジャブだ。

ジャブは、短く、小きざみに打つストレート。

入江聖奈

この左手のジャブで、近づいてプレッシャーをかけてくる相手の勢いを押しとどめ、力のある右ストレートやワンツーをヒットさせる。攻撃と防御がひとつになった技だ。

これまで何千回、いや何万回と練習で打ちこんできた。

重い袋を持って手首をきたえたり、男子選手の動画を見て研究したりと、努力と工夫を重ねたのだ。

予選の2試合、続けて準決勝を勝利して、準決勝へと進んだ入江。この試合を勝つために立てた戦略は、ずばり「ツノガエル作戦」だ。

カエルへの、あふれる愛

入江は、カエルが大好きだ。

Tシャツ、マスク、タオル、リュックなど、持ちもののほとんどすべてにカエルがデザインされているほどの徹底ぶり。

しかも、かわいいキャラクターものではなく、色・形ともリアルなカエルが好きなのだ。

きっかけは、高校2年生のとき。

両生類が好きな同級生に影響を受けて、「ドテツとした体形と、つぶらな瞳を見て、かわいさに気づいてしまった」という。

自分でも「ジャイ子」と名づけたツノガエルを飼ったり、公園の池へカエル観察に行ったりする。

カエルへの愛は、ハンパじゃない。「オフの時間は、カエルに費やしたい」と語るほど。ツイッターにも、カエルの写真がいっぱいだ。

「ツノガエル作戦」で、準決勝を勝利!

ところで、準決勝の「ツノガエル作戦」とは?

ドッシリした姿のツノガエルのように、後ろに引かず、常に相手にプレッシャーを

入江聖奈

かけるよう、前へ前へという姿勢を心がける——。

カエルにたとえるところがなんとも入江らしいが、伊田武志・女子強化委員長と一緒考えた、強気の作戦なのだ。

試合が進み、判定が割れて、迎えた第3ラウンド。

さすがに、疲れがたまってくる。

苦しいなかでも、入江はパンチをよけては打ち返し、相手に流れを渡さない。

ぜったい後ろに引かない、ツノガエルのように。前へ、前へ——。

ジャッジの判定は、3-2。

「ツノガエル作戦」、大成功だ!

接戦を制した入江は、カエルのように跳びはねて喜んだ。

この準決勝で勝利したことで、銀メダル以上が確定した。

「歴史の扉が、5ミリくらい開いたかな」

日本女子初のメダルの色は、金か、銀か?

日本中の期待が、一気に高まった。

ボクシングの原点は『がんばれ元気』

入江聖奈は、鳥取県米子市に生まれた。

ボクシングを始めたきっかけは、小学2年生のときに読んだボクシング漫画『がんばれ元気』。

主人公の心やさしい少年が、プロボクサーを目指し、練習や試合を通じて成長していく物語だ。

「わたしも、こんなふうになりたい!」と、米子市内のボクシングジムに通いはじめた。「練習したぶんだけ、うまくなるのが楽しい!」

中学では陸上部に入り、高校からはボクシングに専念した。

2018年世界ユース選手権で、銅メダルを獲得。

翌年、日本体育大学に進学した。

目指すは、東京オリンピック!